

関西学院大学名誉教授 細川正義

第25回

近代初めの切支丹迫害の歴史を人間凝視の視点で掘り起こした 遠藤周作
—『女の一生』(一部・キクの場合)にみる真実の愛と祈りの力—

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産へ登録されることになって、長年このテーマで作品を書き続けてきた遠藤周作の文芸があらためて注目されるようになった。中でも、一八六七年に端を発した、長崎浦上地区の切支丹たちが逮捕され、萩、津和野などに幽閉されそこで厳しい拷問を課せられた所謂「浦上四番崩れ」と名付けられた事件に題材を求めた『最後の殉教者』と『女の一生』(一部・キクの場合)は、日本の近代がスタートしたにもかかわらず、キリスト教を信仰していたというだけで捕らえられ、生まれた土地や田畑を追われ、遠い場所に流されて、肉体と精神の限界に追い込む拷問によってキリスト教を棄てることを強要された人たちが、そうした弾圧の中で、自己の向き合った〈真実〉を懸命に守り通した姿を描き出すことをテーマにしており、キリシタンの弾圧と潜伏を余儀なくさせた惨酷な日本の歴史を、人間凝視の視点で浮き彫りにしたものとして特に関心が持たれる作品であると言えよう。

遠藤は一九五九(昭和三四)年に彼の最初の切支丹小説として『最後の殉教者』を書き、一九六六(昭和四一)年の『沈黙』を経て、一九八〇(昭和五五)年一月より一九八二年二月まで朝日新聞に『女の一生』の題で連載し、朝日新聞社より単行本として刊行するときに明治の黎明期の「浦上四番崩れ」を材料として描いた前半部分を『女の一生』(一部・キクの場合)とし、後半の第二次世界大戦時の出来事を中心に描いた部分を『女の一生』(一部・サチ子の場合)として切り分けた。

『最後の殉教者』と『女の一生』(一部・キクの場合)が素材とした

「浦上四番崩れ」とは、長崎浦上地区のキリスト教信者が一八六七年一〇月の大政奉還直前に大量に逮捕されたことに始まり、その後、新政府の木戸孝允の判断で萩、津和野、福山などへ流罪にされた事件であるが、この長崎浦上地区には過去に一七九〇年に信徒が取り調べにあった「浦上一番崩れ」と称される事件から、一八三九年、キリスト教信者に対する密告、捕縛事件が起こった「浦上二番崩れ」、更に一八五六年に起こった沢山の信徒たちが捕縛された「浦上三番崩れ」という悲劇があり、それを踏まえて称されているものである。こうした長い弾圧の歴史があったが故に一八六五年に建立された大浦天主堂に新時代の到来を期待した潜伏キリシタンたちの願いは強く、この明治政府の施策とのギャップの中で浦上地区の人々の苦渋を深く眼差しながら遠藤はこれ等の作品を仕立て上げたと言えよう。

『女の一生』(一部・キクの場合)は、大政奉還を前にした幕末時代の長崎浦上地区の農家の娘ミツと、禁制の隠れキリシタンである清吉の愛を中心に、苛酷な時代の不運と戦いながら、顕現されていく真実の光を確信するまでを描いた作品である。

作品は、まず、キクが幼い日に、子猫を助けるために木に登って降りられなくなったところを清吉が通りかかり助けたところから始まる。

年頃になり、長崎へ奉公に出たキクは清吉に再会する。キクは清吉に恋し、彼のところへ嫁ぎたいと思うが、清吉が、禁制の隠れキリシタンであることを知る。その頃、長崎の大浦教会の神父になったプチジャンは、日本の隠れキリシタンを探しあて、彼らにひそかに洗礼やミサを行

つていた。やがて長崎の役人にも露見し、多数の隠れキリシタンが囚われ、津和野をはじめ全国に流刑になる。特に、信仰心の強い者たちは津和野に流刑になった。その中に清吉もいるのをキクは見た。

清吉を助けたいと強く願うキクは、プチジャンに出会い、大浦天主堂で働く。しかし、神父たちが祈り、日本政府に抗議しても、清吉たちは釈放されなかった。キクは清吉を助けたい一心で、役人へのつてを求めて、丸山で芸子になって働く。そこに津和野で清吉たちを迫害している役人、伊藤清左衛門が来て、自分の言いなりになれば清吉を楽にしてやると言われ、キクは伊藤に身を任せてしまう。そして、伊藤に津和野の役人に目こぼしを願うには金が要ると言われ、身体を売って金を作るが、伊藤はその金を使い果たしてしまう。

キクは、清吉に送る金を作るために自らの身体をさいなみ、労咳にかかってしまう。店にも戻れなくなり、雪の降る日、大浦天主堂のマリア像のそばで死んでいく。

明治維新後、キリシタン迫害に対して、外国からの明治政府への非難は高まり、一八七三（明治六）年、キリシタンたちは釈放され、信教の自由が認められた。清吉も長崎に帰り、キクを探すが、彼女はもうこの世にはいなかった。

一九一三（大正二）年になって、老人になった清吉のもとに伊藤から手紙が届き、二人は津和野で再会する。伊藤は清吉に、キクに対する仕打ちをすべて告白し、その後深い悔恨の中でキリスト教信者になったことを打ち明けた。伊藤への怒りがこみあげる清吉だが、伊藤を信仰に導いたキクの一生は無駄ではなかったと思うのだった。

キリシタンの弾圧・迫害を、キクと清吉の愛情物語を通して描いたこの作品の焦点が、キクが伊藤清左衛門に全てを略奪され、清吉との再会の願いも実らないまま病死するが、しかし、最後は大浦天主堂の聖母マリアのそばで「いらっしやい、安心して。わたくしと一緒に……」と促すマリアに抱かれるようにして亡くなったこと、そして津和野から解放されて戻った清吉がキクの墓に合掌する結末を描くことで、古浦修子氏

が「一人の男性を懸命に愛し、苦しみながらも真つ直ぐにその想いを貫いたキクの生き方が、結果的に崇高な「愛」の形を実現した」（「キリスト教文藝」三四輯、二〇一八年七月）と述べているように、弾圧・迫害の理不尽さと、それにも屈しないで人間としての真を貫いた心の強さを描いたところに集約されていることは間違いない。

しかし、この作品はもう一点、キクの人生を踏みについた伊藤の人生にも焦点があてられていることを見逃してはいけない。伊藤は清吉のことをだしにしてキクの体を自由にし、その度に清吉を楽にするためには金が必要だと言って工面させた。「俺あ……まこと悪か男ばい。まこと悪か男たい。」とつぶやきながらも結局キクが病気で命を失うまで搾取を繰り返した。しかし、キクの検死にのぞんだ伊藤は、周りのキクの亡骸に対するさげすみの声に対して、「お前らに……こん娘の何のわかつとつか。（略）こん娘にくらべたらお前らやこん俺のほうが……もつとうすぎたなかぞ……」と激しい怒鳴り声を発した。その彼は、四〇年後に清吉と再会したときに、あの頃は、清吉に対して無償の愛を示すキクに心を動かされ、そのキクが懸命に尽くす清吉に対して嫉妬していたことを明かし、「おキクさん、俺あ、俺があんたの体ば奪うた時……あんたが眼から流した泪のことは……どげんしても忘るつことのできんやつたたい……」と語り、そして今はキリスト教の信仰を持ち深い懺悔の思いでいることを告げたのである。伊藤を改心に導いたものは、笛木美佳氏が指摘するように「（愛の実践者）キクの「泪」（「キリスト教文学研究」一八号、二〇〇一年五月）であることは間違いない。即ち、一人の人間の「真実」の行為かと思いが、他者の心に響き、作品の最後で清吉が「もうよか、伊藤さん。おキクさんはあんたに苦しめられたばつてん、あんたば別のところに連れていったたい。そいだけでもあん人の一生は、無駄じゃなかつた」と語る心情は、読者に深い共感をもたらす。本作は、日本の近代が始まったにもかかわらず行われた無慈悲で残酷な歴史の暗部を描く一方で、その悲劇に決して屈することのない人間の「真実」が発する普遍の力を伝えた作品として高く評価することが出来る。